

若人、いざ

先日、授業でちょっと余った時間があつたので、「青年、若者、若人」が男女いずれかを聞いてみた。すると、全員が「青年」というのは男ではないかという。「若人」についても男ではないかという意見があつた。「青年海外協力隊」「青年の家」みたいに、集合として言う場合は男女両方を指すが、「二人の青年が歩いてた」と書いてあつたとすると、確かに男を想像してしまうような気がする。「青年」を辞書で引くと、「年の若い人。青春期にある男子、また女子。多く、一四、五歳から二十代くらいの時期の人をいう。」（小学館『日本国語大辞典』第二版）という記述もあるが、「青春期の男女。10代後半から20代の、特に男子をいうことが多い。」（小学館『大辞泉』第二版）のような記述もある。「青年」には男女での偏りがありそうだ。ちなみ

に「少年」もそうだが、「少女」という言葉がある。「青年」に対して「青年」はない。「若者」「若人」についても男女の偏向を検討してみる必要がある。ついでながら「青年、若者、若人」がそれぞれ何歳かも聞いてみた。ほんの17人のデータなのだが、参考までに紹介すると、各々の最低年齢と最高年齢は、青年で162—268歳、若者で140—299歳、若人は125—278歳だった。中央値はほぼ21歳くらいで基本的なイメージは重なる。若くてもいいのは「若人」のようで、「青年」は範囲が狭い。私の中学校の校歌には、「若人」という言葉があつたから、「若人」には中学生も入る。逆に、「集え、青年」のような表現のある中学校校歌はなさそう。では「若い人」はどうだろう。インターネットの用例を見ると、「会員を増やすために若い人に声をかけまし

た」みたいな例があつた。ただ、その会とは老人会。「老人会では、若い人はラジオ体操を……」のような表現もできる。「若い」という性質は相対的なのだ。そして、「若い人」という「語を組み合わせた表現」の場合、「若い」という語の意味が生きてさえいれればいい。だから、老人会の会員でも「若い」ことはある。一方、「若者」「若人」は一つの単語として意味が特殊化しているのだ、老人会には入れない。さて、私の中学校の校歌の「若人」は、もちろん両性でなければならぬ。そう思って懐かしの校歌を歌ってみた。「♪集い来し若人、いざ、ふーふーふっふーん」。あれ？ 記憶が薄れて、途中からハミングになつてしまふ。「若人」であつたのははるか昔。でも、考えようによつてはまだ「若い人」。いざ、がんばろう！

早稲田大学教授

森山卓郎
もりやまとくろう